【研究ノート】

# 自然の近さ

## ――ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケ

神子博昭

きょうは、「自然の近さ」というタイトルで、ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケの詩について、少しお話ししたいと思います。

ここでいう「自然」とは、山や川、森や海、といった自然では、かならずしもありません。それも含むのですが、むしろ、「自然にそうなる」とか「そうなるのが自然だと思う」とかいうときの「自然」の意味です。つまり、無理に逆らわなければそのようになる、といった、ある傾向とか、ある流れとかをさしています。

人間は意志をもつ生物ですから、ある傾向とか流れに抵抗できます。そうではあるのですが、大まかに見れば、人間は、生きている自分の状況にそって、生きています。自分がいま、ここに、こうして生きていること、この環境に、この時代に生きていること、自分がこのような人間であること、そうしたことを大枠では受けいれて生きています。生きていることは、ある意味では、自明なのです。その自明さをもとに、世の中の特定の傾向とか流れに、抵抗することもあるでしょう。それでも、自分がいま、ここに、生きていることそのものは、受けいれているのです。そのように「自然に」生きた詩人として、ここでは、ゲーテ、アイヒェンドルフ、メーリケの三人をとりあげてみます。

「自然に」生きた、といっても、もちろん、この三人がなんの苦労もしなかったという意味ではありません。ひとが背負う苦しみ、悲しみ、つらさを、このひとたちも背負いました。いや、いっそう深く、苦悩や悲哀を感じとったといってもいいでしょう。三人は、いろいろな詩を書きました。とくにゲーテ（一七四九―一八三二）は、それこそ、ありとあらゆるテーマや形式で詩を書きましたが、ここでは、異性への思い、恋情をとりあげます。

アイヒェンドルフ（一七八八―一八五七）では、故郷をめぐる思いをとりあげます。異郷へのあこがれ、また逆に、故郷への思いです。

メーリケ（一八〇四―一八七五）は、日常のかたすみに生きることを選びとりました。日常のなかで経験される、ささやかではありますが、真実な感情がメーリケの詩には生きています。

## 一、聖なるあこがれ

ゲーテの詩では、まづ『五月の祝い』です。これはたいへん有名な詩です。ゲーテの書いたすべての詩からアンソロジーを編むとしたら、かならず、といっていいほど、選ばれる詩です。いまふつうにいうドイツ語は、一六―一七世紀ごろ、少しづつ形成されはじめましたが、そもそもドイツ語は、この詩によってはじめて、詩のことばとなったといってもいいほどの、画期的なものです。

ここには、むだなことばがいっさいありません。しかも、わずかなことばで、無限の思いがうたわれているのです。よぶんな情景の描写もなければ、飾りものの場面の説明もないのです。ただ、ただ、心のこもったことばです。まさに、それゆえに、というべきでしょうか、ドイツ語を母語としないものには、どう読んだらいいか、かえってとまどうのではないでしょうか。少なくともわたしには、そうでした。

そこで、わたしは、この詩の背景に、いつも『出会いと別れ』という、これもゲーテの、しかも、『五月の祝い』とほぼ同じころ書かれた詩をおいてみることにしています。

『出会いと別れ』は、いわゆる「後朝の歌」です。男女が一夜をともにして、別れる朝、別離の悲しみをうたったものです。

ここでは暗い森を、馬にのって一気にかけぬける「わたし」の期待と緊張が、そして逢瀬の歓びと、朝の別れから生れる悲哀とが、うたわれています。

心はたかなる。すぐさま馬へ！
はやくもひた駆る　いくさに勇士のおもむくよう。

二

ときは夕べ　大地ははや眠りにつき
山々に夜の帳のたちこめる。
霧をまとって柏のすがたは
巨人かとそびえたち
闇は林の茂みから
無数の黒い瞳をのぞかす。

暗い森を駆けぬけて、詩の語り手／うたい手は、恋人の腕のなかにとびこみます。

きみに逢えた。心はなごむ。
よろこびがきみの目からそそがれる。
ぼくの心はきみによりそい
つく一息もきみのため。
ばらいろの春のいろどり
あかるむ顔もいとおしく
そのやさしさの　おお神々よ
わが身にあまり　おもいもかけず。

そして一夜をともにしたあと、別れの朝がやってきます。

はや別れ。なんたる悲しみ　またつらさ！
きみの瞳が心をもらす。
くちづけのいとおしさ
おお　よろこびよ　くるしみよ！

きみはもどる　ぼくはたたずむ
うるむ目を伏した地からきみの方へ
だがしかしなんたる幸せ　愛さるるとは
また愛するとは　神々よ　なんたる幸せ！

この「ぼく」が、夜が明けきって、輝くばかりに日の照らす野を眼下に、『五月の祝い』をうたいあげているのです。

ついでにいえば、この詩の出会いと別れの様子を、三つ目にとりあげる『悲歌』のとき、比較のため、もう一度、思いおこしてみましょう。

五月の祝い

なんとあざやか
自然のすがた！
日のかがやき！
野のわらい！

ほとばしる
花という花　枝々に
歌という歌
しげみごと

よろこびは
ひとの胸から

おお大地　おお太陽
おお幸よ　溢れる心

おお愛よ　おお愛よ
黄金なす美しさ
朝雲の
かの峰にかかるよう

おまえの恵み　幸うけて
野はよみがえる　あざやかに
花のかすみに
世界はみちる

おお少女　少女子（おとめご）よ
ぼくはおまえを愛するよ！
かがやくよ　おまえの瞳
おまえはぼくを愛するよ！

ひばりは愛す
うたとおおぞら
朝花は
空のかおりを

あつい血で
ぼくがおまえを愛するように

三

おまえはぼくに青春と
よろこびとたのしみと

あらたな歌と
おどりとをあたえてくれる
幸せであれ　永遠に
おまえがぼくを愛するごとく

五月の世界では、枝々に花という花が、しげみごとに鳥たちの歌が、そしてひとの胸からはよろこびが、ほとばしりです。詩は、各行、ふたつしかアクセントがありません。躍動感と軽快感にあふれ、はじめからしまいまで、一気にはしりぬけるようなリズムです。

「おお愛よ　おお愛よ」という呼びかけが、この詩の中心、脈うつ心臓です。愛の恵み、幸うけて、野はよみがえり、花咲き、鳥はうたい、ひとの心はよろこびにあふれるのです。

愛にあふれる「ぼく」の目に、世界が輝いてみえる、というより、むしろ、愛が、花を咲かせ、鳥をうたわせ、ひとを喜びでみたすのです。自然は、そしてひとも自然なのですが、愛によって、生きているのです。

愛が、少女への愛が、ゲーテの詩の中心にあるものです。

ただ、この幸福な愛も、実際のなりゆきでは、片田舎に安住することをゲーテがきらったため、不幸な結末をむかえました。なにもいわずにゲーテは、少女のすむアルザスを立ち去ったのでした。別れを告げたのは、かれの故郷フランクフルトに帰りついてからでした。牧師館の娘、フリーデリーケの傷心は察するにあまりあります。ちなみに、フリーデリーケは、生涯、独身であったそうです。

四

聖なるあこがれ

何人にもいうなかれ　賢者のほかには。
世俗は嘲りをこととするものなれば。
わが称えんとおもうのは　いのちあって
しかも炎の死にあこがれるもの。

愛の夜のほてりをさます冷気のなか
そうした夜におまえも生まれ　また自身子を成したのだが
ふとあやしい思いにおそわれる
音もなく燃えたつ蠟燭の明りを見ると。

するとおまえは　もはや
闇夜のなかにひそんでいられず
あらたな渇きにかりたてられ
いっそう高い交わりをもとめる。

いかなるへだたりもものともせず
呪縛されたように飛び来り
蛾の身にして　ついには光りをのぞむあまり
おまえは炎に焼かれてしまう。

それゆえ　死して成れよ！　と
このことのわからぬうちは
そなたは暗き地上をあゆみ
くすんでは消えてゆく過客にすぎぬ。

これも有名な詩です。ゲーテの詩は有名なものが多いのです。ドイツ人なら小さいころから、ゲーテの詩を学校で暗誦させられたりしているからですが、日本人が、おれもゲーテの詩を知っている、と暗誦しだしたら、どう思うでしょう。日本人がなんでまた、という意外な顔をするかもしれませんし、あるいはまた、やれやれ、またゲーテかい、かんべんしてほしい、と思うかもしれません。いまは事情が変ってしまったのかもしれませんが、ある年齢以上のドイツ人には、ゲーテのいくつかの詩は、記憶の一部となっているでしょう。ただこの詩は有名ではありますが、まさか学校で暗記したりはしなかったでしょう。

この詩は『西東詩集』という一巻におさめられている一篇です。ペルシアの詩人がうたった、という設定になっています。この虚構は、目だちませんが、重要な意味をもちます。

まん中の三節で、詩の語り手／うたい手は、蛾に呼びかけています。御存知のとおり、蛾は灯火に群がり、ときとして炎で身を焼いてしまうこともあります。夜の闇のなか、身を焼かれることもいとわず、火のもとに飛び入ってくる蛾のひたむきさに、詩の語り手／うたい手は異様なほど、心をよせているのです。

いまゼーバルトというひとの『アウステルリッツ』を少しづつ読んでいて(白水社から邦訳あり)、たまたま蛾について、こういう記述がありました。

この小説の語り手「わたし」はアウステルリッツという人物と知りあい、彼の話を聞くことになるのですが、そのアウステルリッツが若いころ、友人の屋敷に夏、とまりがけででかけていった、ある晩、その友人とランプをもって野にでて、蛾を集めたという回想があります。アウステルリッツのいうには、蛾は幼虫のときは、ひたすら食べつづけるが、一度飛べるようになったあとは、いっさい食べものをとらず、ひたすら子孫をふやすことに専心する、というのです。

蛾はひたすら交わり、また光をめざして飛びこんできます。ゲーテは自然の研究者でもありましたから、このことを十分知っていたかもしれません。

二節目、おまえが生まれ、また自身子をなした、とありますが、この「生む」zeugen は、おわかりのとおり、生殖する、という単語です。そして「いっそう高い交わり」の交わり Begattung とは、性交そのものをあらわす単語です。

個体と光との一体化が、一段高められ、神秘化されてはいますが、オスとメスとの交わりと同質のものと、とらえられているのです。蛾は、レトリックでいえば、提喩ということになるでしょうか。つまり「愛にかられ、光にあこがれるもの」ようするに「生きているもの」を類とする、その一つの種ということになるでしょうか。

愛にかられ、光にあこがれる蛾の特性に、生あるものの特性そのものを、詩の語り手／うたい手は見ているのでしょう。生きることは、愛に身をゆだねることなのです。もっと身も蓋もなくいってしまえば、まぐわうことなのです。

「死して成れよ！」はこの詩をはなれて有名になった一句ですが、し

かしおもいきったこの一句が生れるためには、ペルシアの詩人がうたうという虚構が欠かせないものだったでしょう。またこの虚構をはなれるとき、この句は、いささかあやうい要請となります。

さてゲーテの三つ目の詩は、長詩『マリーエンバートの悲歌』です。七十歳を迎えた老ゲーテは、もう人生の喜びもないと思っていたやさき、十七歳の娘と出会います。おもいきって結婚の打診をするのですが、丁重にことわられます。それはそうでしょうね。ついでにいいますと、いろいろな事情があったのでしょうが、この娘ウルリーケ・フォン・レーヴェツォフも、生涯独身のままでした。

ではいままでの詩とのつながりを中心に、この長詩の一部に、といっても重要な部分にふれてみましょう。

第一節は、再会に胸ときめかせて、また不安もかかえて、娘の滞在する家の門前にたった「わたし」の姿と思いです。

この再会になにをのぞめよう
蕾のようなこの一日から？
天上のときとなるか　また奈落の底か
なんと心のゆれること！――
迷うまい！　あのひとが天の門口に姿を見せ
その腕におまえを抱きとってくれよう。

つづく三節は娘との出会いと別れです。

こうして楽園に迎えられた。

六

永遠に美しい命にふさわしい身であるかのように。
もはやなんの願いもなく望みもなく　欲するところもない。
心の奥の思いはかなった。
美しいばかりのこのひとを見つめていれば
あこがれの涙の湧くこともない。

日はすばやく翼をふるい
時は気づかぬうちにすぎさった！
夕べの口づけは誓いの封印
あすの日も変りはしないと。
おだやかにながれる時は　どの時刻も
姉妹のように同じであり　またそれぞれにかけがえない。

そしてさいごの口づけ　むごいほどに甘く
からみあう二人の愛のおりなすあや目を千々にひきさく。
立ち去る歩みは　急ぎ　ためらい　敷居にとどまる
炎もて知天使に追いはらわるるこの身であるか。
夕暮れの小道にたたずみ　暗澹と目をこらし
いま一度ふりかえっても　すでに門は閉ざされている。

はじめにとりあげました、ゲーテ二十一歳のときの詩を思いおこしてください。別れにあたって、つらさはあるのですが、それでも「ぼく」の胸は幸福でいっぱいなのです。ゲーテ自身のことについていえば、彼はフリーデリーケをすててゆきます。フリーデリーケは、理由もきかされず、ひとりのこされることになります。

それが、この悲歌では、いわば逆になります。別れを告げ、家をあとにしたのですが、もう一目見たいと、ひきかえそうとしても、「すでに門は閉ざされている」のです。アダムとイヴを楽園から追放した知天使ケルビムは、剣をもって楽園の門を見張っています。「わたし」には、もう楽園にもどる手だてはないのです。

詩はこのあと、回想して、老いて、なにもかも失せたと思っていたとき、「あなた」が「わたし」のまえにあらわれたといわれています。「あなた」がもう一度、生きる希望をくれたのです。

わたしたちの汚れなき胸底にはあこがれが波だち
より高く　より清らかで見知らぬものに
感謝の念からすすんで身をささげようとする。
そのようにして永遠に名づけえぬものの謎をとく。
これをしも敬虔という！――この聖なる高みに
触れたと思えることがある　それはあのひとのまえに立つとき。

ここに、さきほどの蛾の詩の中心にある思いが読みとれるでしょう。「あなた」への思いとは、性愛の思いであり、またそれ以上のものとみなされた思いでもあるのです。いわば聖なる性愛の思いなのです。

だがそれも果たせぬ夢です。落魄の数節で、この長い詩は閉じられます。

いまはひとりにしてほしい　ともに歩んだあなた方だが！
この崖に荒地に湿地に　ひとりだけにしてほしい。
ゆくがよい！　あなた方には世界がひらけている。
地ははてなく　天は壮麗にして広大だ。
観察し探究し微細をきわめよ
自然の秘密をたどたどしくまねぶがよい。
わたしにはすべて失われた　このわたし自身すら。
これでも神々の皆さまの寵児であったのに。
皆さまはわたしをためし　パンドラをさずけてくださった。
豊かさはかぎりなく　危険はいっそうかぎりなかった。
おしみなく与える聖なる口にわたしをおしあて
ついでひきはなし　奈落の底につきおとす。

## 二、異郷にて

つぎはアイヒェンドルフです。

一八世紀末から一九世紀にかけて、ロマン派の文学運動がありました。身分社会や宗教、慣習などの制約から身をときはなち、自由に魂を飛翔させようという要求がそこにはありましたが、「さすらい」は大きなテーマでした。

フランスは一八世紀には、パリ、ヴェルサイユを中心に、全国を統一する道路網が整備されました。これはフランスという国家機構の根幹です。鹿島茂さんというひとの書いたものに、こうありました。フランスではどの街にいっても、かならず「パリ門」といわれるものがある。これは、ようするにパリに通じている道を示している門だというのです。（『馬車が買いたい！』）フランスの旅は、パリに向かい、ま

たパリからもどる道のりなのです。

ドイツが統一されたのは、ようやく一八七一年のことです。それまでは、大小三十いくつもの国や自由都市にわかれ、長いあいだ、国境と関税の障壁がありました。当然、パリのような中心になる大都会はなかったのです。旅するひとは、国境をこえて、いくつもの国や都市をわたり歩くことになります。旅の方向性がないのです。

また職人の徒弟制度が一九世紀を通じて、いまだ生き生きとはたらいていたため、親方になろうとする、もしくは、まだなれない職人は、ドイツ中を、それどころか、ヨーロッパ中を遍歴してまわったのです。

こうした背景があるからでしょう。さすらいの歌、故郷をおもう歌は、ドイツ人にとっては独特な意味をもつことになりました。

アイヒェンドルフの詩は、そうした背景のもとで、たいへん愛好されたものです。そして彼の詩は、異郷へのあこがれと、異郷にあって故郷を思うこととが、じつは同じ天空のもとでの思いであることを示しています。つまり旅人は神のもとで、生まれ故郷をたびだち、また異郷にあって、その故郷のことを思いやっているのです。故郷と異郷とを親しみの空間がつつんでいるのです。

あこがれ

星のきらめく夜だった。
窓辺にひとりたたずんでいると
静けさのなかを遠くから
郵便の角笛の音がきこえてきた。
胸はたかなり
ひそかにこう思ったものだ。
ああ　だれかいっしょに旅してはくれまいか
この輝くばかりの夏の夜を！

若いふたりは歩いていった
山の斜面のかたわらを。
歩みつつふたりのうたう
その歌が静かなあたりにこだました。
目もくらむような切り通しがあり
森はかすかにざわめいていた――
岩間からほとばしり
森陰に消えゆく泉もあった……

またうたう。大理石の像があり
庭があった　大岩のかなた
暮れゆく葉群に朽ちはてた庭だった――
また月明りのお城があり
乙女らが窓辺にもたれ　きいていた
リュートが嘆きの節をかなで
眠たげに噴井のささやく
輝くばかりの夏の夜だった。

夏の夜の静けさのなかを、郵便馬車の角笛、ポストホルンがかすかにきこえてきます。とくに一九世紀のドイツの読者は、この詩句に、いうにいわれぬ思いをかきたてられたことと思います。じっさいの馬車

八

の旅、道の具合などを考えますと、とても快適とはいえたものではなかったでしょうが。

さらにこの詩には、南国へのあこがれも、うたわれています。大理石の像、泉、庭園、リュートに耳すます乙女ら――これらは北国のドイツ人にとって、つきせぬあこがれの像なのです。

異郷にて

稲妻の閃くかなた　故郷の空より
赤い雲が流れてくる。
父も母もとうになく　そこでは
わたしを知るものもない。
いましも静かな時がおとずれよう。
やがてわたしも安らげる。頭上には
なつかしい森のざわめきをきくのみか。
そしてここでもわたしを知るものはない。

アイヒェンドルフの家は小さな領地をもつ貴族でしたが、彼が二十代のとき、家は没落します。それ以後、屋敷は人手にわたり、アイヒェンドルフは生涯、異郷でくらします。

故郷は戦乱に見舞われているのでしょうか。不吉な赤い光がのぞまれます。しかし、もうそこには父も母もなく、おそらく家もなく、「わたし」を知るひともいません。いまここのひとけない森のなかで、やがて「わたし」も土のなかに横たわることになるでしょう。木々の葉ずれだけが音たてることになるでしょう。

月夜

ひっそりと天が
地にくちづけしたのか
大地は花の光りにかすみ
天を夢みるようだった。

風が畑をわたっていった。
しずかに穂がゆれ
森がかすかにざわめいた。
星の明るい夜であった。

するとわたしの魂は
おもむろに翼をひろげ
ひっそりとした野面を飛んでいった。
なにか故郷に帰るおもいであった。

これは、じつは、前の詩とまったく関係ないのですが、前の詩を背景にして、この詩を読んでみましょう。

「わたし」は土のなかに安らいでいると想像してみます。前の詩では深い森のなかのことでしたが、ここでは野や畑がひろがっています。少し矛盾しますが、それはごかんべん下さい。

九

空と大地は神話的・性愛的な結びつきの世界をかたちづくり、「わたしの魂」はそこにつつまれ、その濃密な雰囲気を感じとっています。空と大地とが、ひそかに口づけをかわします。そっと風が穂を波うたせ、森の木々がざわめきます。

「わたしの魂」は翼をひろげ、いわば、よみがえり、この静かな夜をとびたってゆくのです。「わたし」は異郷へのあこがれにかられ、生まれ故郷をあとにしました。いまふたたび、魂は故郷に帰ってゆくのです。ただこの故郷とは、生まれそだった地上の土地というわけではないようですが。

## 三、市井のかたすみにて

ここ低地はクレーファーズルツバッハに
百十三年立っておった——
教会の塔を守る　わしは雄鶏
飾りともなる風見鶏。
嵐のときも風吹くときも雨の夜も
変らず村を守っておった。
いくたびか稲妻の光に照らされ
霜おく朝には赤いとさかも白うなった。
このうえもなき夏の日には
みな陽ざしをさけてこもるものだが
そんなときも容赦なく太陽は
この金色の身を焼いたもの。
そこで歳のわりには肌は黒ずみ
色つやもすっかりあせた。
というわけで村の衆
わしをさげすみ　なんと　お役御免とあいなった。
やむをえんか！　これが世のならい
いまでは別のやつが据えられておる。
鼻高々　色どりもあざやかに　回れまわれ！
おまえさんにはまた別の風が吹く。

これはメーリケの『老いた風見鶏』という長詩の、はじまりの部分です。メーリケは南西ドイツの小さな町や村で、長年、牧師の職をつとめていました。

この詩では、老いて、お払い箱になった風見鶏が語り手／うたい手です。風見鶏はあやうく処分されそうになりますが、メーリケ本人を思わせる牧師にひろわれ、その部屋にかざられることになります。

この敷居に守られて平和が住む！
白塗りの壁は明るく
これはまた不思議な香り。
書物すなわち学者のにおい
ジェラニウムと木犀の香り
またかすかにタバコの煙。
（すべてわしには見知らぬもの）
さて古い暖炉が
左手のすみに。

塔かと紛うほど迫りあがり
先端は天井にとどき
柱飾りに花模様　うずまき　そばだつ――
おお　安らぎの部屋のここちよさ！
てっぺんの小さな花輪に
細い棒で鍛冶屋はわしを据えつけた。

風見鶏は牧師の生活と思索の圏内にはいりこみます。その居心地よさを享受します。その部屋の安らぎと質実さは、そこに住む牧師の精神のうつしでもあります。

ここに来てこのかた　わしには
冬がもっとも好ましい。
一日また一日と静かに流れ
やがてまたうれしい週末！
――金曜の夜　ときは九時
なつかしいランプの明りのもと　ひとり
御主人は思案顔
日曜の説教か――ちがいない。
思いめぐらし　しばし炉辺にたちどまり
またあちこちと歩きまわる。
言い回しははや血をめぐり
やがてつむがれ文となる。
そのさなか　ふと歩みをとめて
窓をあける――
ああ　星影の大気の
なんと清浄に吹きよせること！
フェレンベルクの山の輝き
深く雪におおわれたシェーファービュールの丘が見える！

この詩は牧歌と名づけられていますから、修復できないほどの分裂や、傷の深さは表現されません。そういうジャンル、というか、形式の詩をメーリケは選びとったのです。つまり詩人はここで、お払い箱の風見鶏を設定して、牧師の生活圏の内部にはいりこむ視点をつくりだしたのですが、そのさき、たとえば、牧師自身の心のうちや、家の暗いかたすみまでは、その視線はとどかないのです。これは詩人メーリケが外向けに描きだした肖像画といっていいでしょう。しかしこの牧歌は、大きな枠組として、たとえ人生のうえで波風が立とうとも、意識的に維持されることになります。

すてられた娘

朝　一番鶏が鳴き
星明りのあるうちに
かまどに立ち
火をおこす。

炎のうつくしさ。
とびちる火花に

じっと見入る
つらさをこらえ。

ふと思いだす。
不実なひと
ゆうべあなたの
夢をみた。

とめどなく
涙があふれる。
一日がはじまる――
おお　いっそこのまま暮れてほしい！

牧歌的な風景、家屋敷のなかでも、風見鶏の視線のとどかない、暗いすみは、かならずあります。

平明で、むだがなく、しかもなんと切実なことばでしょう。おそらく下女なのでしょう、朝一番におきて、暗いなか、火をおこします。茫然と火を見つめていると、突然、昨夜、恋人の夢を見たことを思いおこします。涙があふれます。

おお　いっそこのまま暮れてほしい！

――O ging' er wieder! もともと下女ですから、それほどことばがあるわけではないのですが、このわずかな単語のなかに、たとえどれほどことばをあやつることのたくみなひとでも、どうしてもいいあらわせないような思いがこめられています。

ゲーテのドラマ『ファウスト』では、身ごもったグレートヒェンは、結果的にはファウストにすてられることになるわけですが、この詩の娘も、グレートヒェンのひとりといっていいでしょう。

## クリスマス・ローズに寄す

### I

森の娘　白百合に似たる花。
長いこともとめつづけ　しかも得られず
いま荒涼と冬めいたよその墓地に
はじめて目にする美しい花！

だれの手に育てられ花咲くおまえか。
だれの墓を守るおまえか。
若者か　ならそれは幸ある若者。
乙女か　ならそれは祝福をうけた乙女。

闇せまる杜は雪明りにつつまれ
清々しいのろ鹿が草はむところ
御堂のかたわら　水晶の池のほとり
そこがおまえの魔法の故郷。

美しいおまえは月の子ども　日の子にはあらず。
ほかの花の喜びはおまえには命にかかわる。
霜と香りにつつまれた清楚なおまえを育てるのは
天上の冷たさのバルサムの芳しさ。

おまえの胸の金色のふくらみには
あるかなきかの香りがただよう。
天使に触れられ　においたつ
聖母様の花嫁衣裳さながら。

おまえを飾るものがあるとすれば聖なる傷を思わせる
五つの深紅の滴のみか。
いいや無邪気にもおまえは聖誕祭のこの時期に
一息吹きかけ白い衣を緑にかざった。

真夜中の月明りの窪地に
踊りの輪にくわわりにゆこうと妖精が
ふとおまえの神秘のまえに気おくれしたように足をとめ
遠くからそっとうかがい　つと消えてゆく。

II

冬の地面には花の芽となり
蝶が眠る。やがて丘や藪のなかを
春の夜にビロードの翼をふるうこともあろう。
いまはおまえの蜜を味わうことはない。

しかしだれが知ろう　繊細な蝶の魂が
夏の栄華の沈んだのち
かすかな香りにさそわれ
目には見えず花咲くおまえのまわりを飛び交うと。

クリスマス・ローズという花は、アルプス、あるいは南ヨーロッパで、冬、クリスマスのころ、白または赤い花をひらくそうです。根には毒性があり、くしゃみをひきおこす作用があるそうです。冬のさなか、花ひらく植物ですから、ドイツではたいへんめずらしいものでしょう。その花を見つけたのです。場所は墓地。だれかの手によってうえられ、死者を見守り、あるいは、死者のほうがこの花を育てているのかもしれません。

キリスト教が北の国ドイツ、ゲルマンの地にはいってきたとき、御存知のとおり、ゲルマンの古い習俗に重ねるようにして、キリスト教のお祝いが設定されました。たとえば復活祭は、冬が終り、日の光が強くなる春の祭りにあわせてあります。クリスマスも同じで、イエス・キリストの聖誕祭は、大昔の冬至の祭り、つまり、これから日が長くなる、その節目にあわせてあります。

夜の一番長いころ、冬のさなか、新しい時を告げる救世主が誕生するのです。雪と氷と霜、寒さと暗さのなか、荒涼たる俗世に、世の救いの灯がともるのです。そして冬のさなかに咲くこの花は、救いの象徴として、めでられているのです。

Iの部分では、この花をとりまくキリスト教の伝統的な考え方、感

じ方をふまえています。冬のさなか、墓地に咲くクリスマス・ローズは死と滅亡のなかに花ひらく救いのしるしです。あふれるようないのちはないのですが、そこには、気高い、精神的な香りがただよっています。

それにたいして、IIの部分は、かなり奇妙な印象を与えます。墓に咲いているからでしょうか、土のなかに眠る蝶を思いうかべています。これは幼虫のことをいっているのでしょうか。それとも、これは夏のあいだ生きていた蝶の死骸のことをいっているのでしょうか。あるいは、ここはそのまま、文字どおり、地中に眠る蝶なのでしょうか。

いまは冬ですから蝶が花のまわりをとびまわることはありません。しかし蝶の魂なら、クリスマス・ローズのまわりを飛ぶかもしれない、といっています。蝶は、前回にもいいましたが、古代ギリシア語では、プシュケー、つまり魂です。ここはドイツ語では、ふつう魂というとき使われるSeeleではなく、Geist「精神」を使っていますから、少しちがうかもしれませんが、このGeistはプシュケーとなんらかのつながりがあるでしょう。夏のあいだ活動していたものの魂なり精神なりが、いま、クリスマス・ローズのまわりを飛んでいるかもしれない、というのです。

さて、ではもう一度、Iの部分にもどってみましょう。ここの部分の語り手／うたい手は、だれでしょう。はじめは単純に、長いあいだ探していたクリスマス・ローズをやっと見つけたひとだとばかり思っていました。たぶん、そうではあるのでしょう。

ただIIの部分を読んでから、もう一度Iの部分にもどってきますと、奇妙なことを考えてしまいます。

これは全く仮の想定ですが、Iの部分の語り手／うたい手を、夏のあいだ生き生きとうごきまわってはいたが、いまはしかし土のなかに眠り、魂だけが地上をさまよっているもの、と考えたらどうでしょうか。

一四

地上には、ただ雪と霜と氷、寒さと暗さのおおうなか、魂はわずかに一輪のクリスマス・ローズを見いだすばかりなのです。たしかに姿は清らかに、かすかではありますが高貴な香りをたてているとはいうものの、地上には、ただこの花しかないのです。夏の日を生きた魂には、この日常は、こごえた現実なのです。

メーリケの選びとった日常は、風見鶏の目には、なんとも居心地のよいものでした。しかし冬、地中からよみがえった魂の見いだした日常は、寒く暗く、荒涼たるものであったのかもしれません。（了）

（二〇〇四年十月から十一月にかけて公開講座『ドイツの詩と小説』を六回おこないました。これは詩について担当した三回のうち、第二回の講義のために準備したものです。参考のため、当日朗読した三つの原詩をつぎにのせておきます。ゲーテ『聖なるあこがれ』、アイヒェンドルフ『月夜』、メーリケ『すてられた娘』）

Selige Sehnsucht
(Goethe)

Sagt es niemand, nur den Weisen,
Weil die Menge gleich verhönet,
Das Lebend'ge will ich preisen,
Das nach Flammentod sich sehnet.

In der Liebesnächte Kühlung,
Die dich zeugte, wo du zeugtest,
Überfällt dich fremde Fühlung,
Wenn die stille Kerze leuchtet.

Nicht mehr bleibst du umfangen
In der Finstenis Beschattung,
Und dich reißt neu Verlangen
Auf zu höherer Begattung.

Keine Ferne macht dich schwierig,
Kommst geflogen und gebannt,
Und zuletzt, des Lichts begierig,
Bist du, Schmetterling, verbrannt.

Und so lang du das nicht hast,
Dieses: Stirb und werde!
Bist du nur ein trüber Gast
Auf der dunklen Erde.

Mondnacht
(Eichendorff)

Es war, als hätt' der Himmel
Die Erde still geküßt,
Daß sie im Blütenschimmer
Von ihm nun träumen müßt'.

Die Luft ging durch die Felder,
Die Ähren wogten sacht,
Es rauschen leis die Wälder,
So sternklar war die Nacht.

Und meine Seele spannte
Weit ihre Flügel aus,
Flog durch die stillen Lande,
Als flöge sie nach Haus.

Das verlassene Mägdlein
(Mörike)

Früh, wann die Hähne krähn,
Eh' die Sternlein verschwinden,
Muß ich am Herde stehn,
Muß Feuer zünden.

Schön ist der Flammen Schein,
Es springen die Funken;
Ich schaue so drein,
In Leid versunken.

Plötzlich, da kommt es mir,
Treuloser Knabe,
Daß ich die Nacht von dir
Geträumt habe.

Träne auf Träne dann
Stürzet hernieder;
So kommt der Tag heran ——
O ging' er wieder!